

# ミステリ読書案内

2022. 10. 8 発行元

第404号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。今回も、私が読み慣れている作家のシリーズものを中心になってしまう。新しい作家としては敷島シキの『解剖探偵』を取り上げてみることにした。

### 文庫本の書下ろし

新刊の本を探すととなるとどうしても文庫本の書下ろし作品が中心になる。単行本は予算の関係で一本の特集に使えるような本しか買わない。文庫本にしても値段が急激に上がったので一ヶ月に10冊ちょっとぐらいしか買えない。あとはブックオフの利用とか、図書館頼みになってしまう。

よって、最新刊の紹介となると文庫本のシリーズものを中心になってしまう。渡辺裕之も矢月秀作も安

達瑤も私は全作品を読んでいる作家。どうしてもこの『ミステリ読書案内』に登場する回数は増えてしまう。逆に言うと、どうしても苦手な作家の作品には手が伸びないという結果になっている。

世の中にたくさんのミステリ作家がいるのに、偏った選択になってしまうのはある意味やむを得ない現象。「あの作家の作品をどうして取り上げないんだ」というご批判は甘んじて受ける以外にない。ゆっくりゆっくり幅を広げようという気持ちだけは持っているのだが…。

### 安達瑤『悪徳令嬢』

8月に実業之日本社文庫から出た本。安達瑤はもう以前の安達瑤ではない。最近の作品は世の中の出来事をどんどん取り上げてパッサリ切る形になっている。

本書で取り上げているものも、大学理事長のスキャンダル。校舎建設の裏金疑惑、学生相撲出身、悪のちゃんこ屋と来れば何が話題なのかは直ぐにわかる。物語の話し手は冴えない非常勤講師の「僕」だが、大学改革に乗り出す中心人物は創設者の孫にあたる帰国子女の巻き毛のお嬢様「悪徳令嬢」。最初は傀儡の新理事長に見えるのだが、実は…。『ハムレット』の演劇を背景に取り上げ、新理事長の気まぐれで、強烈な行動を描く。旧理事長一派を追い出せるか…。

### 渡辺裕之『死屍の導 警視庁特命捜査対策室九係』

8月に光文社文庫から出た本。『迷宮の門』『天使の腑』に続くシリーズ第三作。特命捜査課兼デジタル保管室は迷宮入りしそうな案件を再分析し、なんとか解決を目指そうとするために設けられた部署。

今回は、新たなメンバーが加わり、4人の小所帯で取り組む。岩城哲孝が財務省職員の刺殺死体を発見。担当の森高管理官からは首を突っ込まないように釘をさされたが、過去に起きた貿易会社社長の殺人事件との共通性に着目して独自捜査を展開する。途中までは通常の警察小説パターンを思わせるのだが、後半は北海道に捜査範囲が広がり、海外との繋がりが見えてくるようになる。この辺が渡辺裕之作品らしいところだ。

### 矢月秀作『死桜 D1警視庁暗殺部』

8月に祥伝社文庫から出た本。『D1シリーズ』の5作目に当たる。警視庁に秘密部署として設置された「暗殺部」。今回はその「暗殺部」そのものが標的になる話。暗殺部三課の隊員が活動中に待ち伏せされ全滅する事態が発生。それを知らされた一課の面々の判断は…。いろいろな手掛かりを分析していくと敵と見なされる集団は、非常に大がかりであり、手の内を知られているようなので、難しい戦いを強いられることになる。矢月作品のひとつの読みどころはハードアクションなので、本作もまた強烈。各人の個性を生かした戦いが展開される。

### 敷島シキ『解剖探偵』

8月に角川文庫から出た本。この敷島シキという作家の本を読むのは初めて。どうやらホラー小説系の出身らしい。角川文庫のキャラクター小説のひとつとして構想されたものようだが、思いの外まともなミステリに仕上がっていたので驚いた。

目玉のキャラクターは二人。ひとり話し手になる警視庁八王子署の刑事の祝依然。刑事に成りたての若者だが、殺人被害者の霊を見ることが出来る特殊能力の持ち主。もう一人は物語の中心人物である「解剖探偵」の霧崎麻里。八王子医大勤務の若い解剖医。ゴスロリ・ファッションで登場。「霊」などとキワモノの設定もあるが、途中の組み立ては論理的。一見自殺のように見える死体にも疑問を持ち、解剖によって科学的な裏付けをしていく。それを過去の事件と結びつけて、隠されていたいくつかの犯罪に迫っていく。祝依の背負っているもの、霧崎の行動の根底となるものが次第に見えてくるようになる。中盤少し中弛みがあるけれども後半はなかなかの展開。最後は意外な犯人にたどり着く。